

連載 週刊 司馬遼太郎

私と司馬さん 手嶋龍一さん 外交ジャーナリスト

35年前に中国で会った司馬さん



てしま・りゅういち 1949年、北海道生まれ。作家。慶応大教授。NHKでワシントン支局長などを歴任。2005年に退職。『ウルトラ・ダラー』『ライオンと蜘蛛の巣』『スギハラ・ダラー』など著書多数。(撮影・崔 承燾)

北京から国際列車でウランバートルへ……。民族飯店に滞在して週に3便の列車を待っていたのですが、同じホテルに泊まっていた司馬さんに招かれました。1975年のことです。私はNHKの若手記者だったのですが、陸路で中蒙国境を越える査証を手に入れ、休暇をとって日本を抜け出しました。当時、中国と対立していたソ連の陣営に組み込まれていたモンゴルには、一般の旅行者が中国から鉄道で行くことはできません。司馬さんは「風変わりな青年が日本から来ている」と聞いて、会ってみようと思われたのでしょうか。『街道をゆく モンゴル紀行』で既にソ連経由の空路でモンゴルを訪れていた司馬さんは、ジンギス汗の国を語って倦むことを知らず、「ひとたび男子として生まれたからには、ゴビ砂漠の南端を経過して、陸路でモンゴル高原に敢然と入る」。そう、男子なら、そんな雲を掴むような野望を持つべきなんだよ」と言われました。その表情は少年を彷彿とさせました。



シティの入り口に立つドラゴン像 (ロンドン)

我々は中国人民解放軍の少年兵士、三侯和忠司さんという切り札を手にしていました。彼の父上は満鉄病院の医師で、後に八路軍に加わり、林彪將軍の肺結核を治療しました。その4年前にも彼の導きで人民大会堂で周恩来首相と長時間の会談が実現しました。その後も中国との交流は続き、中ソ国境へ初めての入境も許されました。

90年代の半ば、私はハーバード大学の国際問題研究所で研究生生活を送りました。そのとき『坂の上の雲』の舞台を目の当たりにしたことがあります。ニューポートの海軍大学に招かれて1週間泊まり込み、シミユレーションに参加した折でした。日本海軍にも思想的な影響を与えたアルフレッド・マハン提督の名が付いた会議室で作業中、校長が姿をみせ、「秋山真之がこの机で研究に打ち込んでいた」と教えてくれました。手嶋さんは外交官の杉原千蔵を描いた最新刊『スギハラ・ダラー』で、インテリジェンス・オフィサー(情報士官)に光をあてている。祖国防衛戦でインテリジェンス・オフィサーの存在は大切です。司馬さんも『坂の上の雲』で、ロシア革命軍とストックホルムで接触した明石元二郎大佐を描写しています。司馬作品には登場しませんが、石光真清をはじめ多くのインテリジェンス・オフィサーが活躍しました。「情報士官は語らず」といいます。情報源を終生守り抜くためです。歴史の裏に分け入ってその本質を明らかにしていく司馬さんの筆で、明治のインテリジェンス・オフィサーは見事に蘇ったと言えるのではないのでしょうか。構成 本誌・山本朋史